助動詞「べし」確認テスト（推量・当然・意志ほか）　解答・解説

■ 解答・解説

問1 エ（当然）。「子となるはずの人だ」の意味です。「〜はずの」と訳せるときは**当然**と考えます。下に体言「人」が続くので、形は連体形「べき」になっています。

問2 イ（なんめり）。「なるめり」→（撥音便）「なんめり」→（表記で「ん」が省かれて）「なめり」となりました。「べき」の下の「なめり」は、もとは「断定『なり』の連体形『なる』＋推量『めり』」です。

問3 「（この子は）子となるはずの人であるようだ。」「なめり」は「であるようだ」と訳します。

問4 **適当**。「家の作り方は、夏を中心にするのがよい」と、よい方法をすすめる文なので「〜のがよい」＝適当です。文脈によっては当然ともとれますが、教訓的にすすめているので適当が基本です。

問5 「家の作り方は、夏を中心とする（夏を第一に考える）のがよい。」

問6 イ（意志）。「この一本の矢で決めようと思え」の意味で、「〜しよう」という話し手の意志を表します。直後に「と思へ」とあり、心の中の決意を述べているので意志です。

問7 「（毎回、ただ当たり外れを考えず、）この一本の矢で（勝負を）決めようと思え。」

問8 □□に入る語は**まじ**。「変るべからず」は「変るまじ」と言いかえられます。「べし」の未然形「べから」に打消「ず」を付けた「べからず」は、意味のうえで「まじ」とほぼ同じになり、「べし＋ず」＝「まじ」という対応が成り立ちます。漢文訓読では「べからず」が「まじ」の代わりによく使われます。

問9 **可能**。「数えあげることもできない」の意味。「計ふべからず」で「数えることができない」と訳すので、もとの「べし」は**可能**です。

問10 **未然形**。下に打消「ず」が来ているので、「べし」は未然形「べから」になっています。

問11 「（心を悩ませることは、）数えあげることもできない。」「あげて〜べからず」で「すっかり（全部）〜できない」と訳します。

問12 ア（推量）。「咲いてしまいそうな（今にも咲きそうな）ころの梢」の意味。「ぬべし（ぬべき）」は「きっと〜だろう・今にも〜しそうだ」と強い推量を表します（「ぬ」は強意・確述）。

問13 **命令**（または適当）。「（世に合わせて生きる人は）まず時機を知るべきだ」と、強く教え示す文なので命令（〜せよ・〜すべきだ）ととります。「するのがよい」と弱めれば適当です。

問14 例文①「べき」＝**連体形**（下に体言「人」が続く）。例文②「べし」＝**終止形**（文末で言い切る）。例文④「べから」＝**未然形**（下に打消「ず」が続く）。例文⑧「べかり」＝**連用形**（下に「けり」が続く）。

問15 **べく・べく・べし・べき・べけれ・○**（未然・連用・終止・連体・已然・命令）。命令形はないので「○」です。ク活用の形容詞と同じ活用をします。

問16 **終止形**。「べし」は終止形接続です。ただしラ変型の語には連体形に付きます（問18参照）。

問17 連体形。「べき」のすぐ下に体言（①「人」、⑨「所」）が続いているので、ここは連体形だと判断できます。

問18 連体形に接続する。ラ変動詞「あり」やラ変型に活用する語（形容詞・形容動詞、助動詞「なり・たり・けり・めり」など）に付くときは、終止形ではなく連体形に付きます。たとえば「あり」に付くと、終止形「あり」ではなく連体形「ある」を使い「あるべし」となります。「あり」は終止形「あり」と連体形「ある」が異なるため、このようなことが起こります。

問19 打消の助動詞は**まじ**。「べし」が推量・意志・可能・当然・命令・適当を表すのに対し、「まじ」はその裏返しで、打消推量（〜ないだろう）・打消意志（〜まい）・不可能（〜できない）・打消当然（〜べきでない）・禁止（〜てはならない）・不適当（〜ない方がよい）を表します。たとえば「べし（可能・〜できる）」⇔「まじ（不可能・〜できない）」が対応します。

問20 「べし」の六つの意味、すなわち**推量・意志・可能・当然・命令・適当**を覚えるための語呂合わせです。「ス（推量）イ（意志）カ（可能）ト（当然）メ（命令）テ（適当）」と頭文字をつなげています。

問21 （例）「すべし」は『するのがよい・すべきだ』とすすめ、「変るべからず」は『変わってはならない』と打ち消す点が異なる。（前者はすすめ・肯定、後者は禁止・否定のはたらきです。）

問22 べし（終止形）。文末で言い切るので終止形「べし」が入ります。「ここで止まるべし。」となります。

問23 イ（当然・命令などの強い調子を出せるから）。「べし」は当然・命令などの強い調子を表せるため、漢文訓読調や格式の高い文章で好まれます。